

## 中国の文化と日本の文化 (その2)

崔 春 基

### 目 次

- ・ はじめに
- ・ 語レベルの「具体性」と「抽象性」
- ・ 生成過程中的中国語の語と生成済みの日本語の語
- ・ 文化の「具体的な指向」と「抽象的な指向」
- ・ おわりに

### I. はじめに

中国と日本の間には、「大きさを尊ぶ文化」に対して、「小ささを尊ぶ文化」という文化の相違点が見られるが、このような相違点が生じる原因を、地理的要因を含む自然条件だけに頼って解明しようとする傾向が見られる。例えば、「中国は国土が広くて資源が豊かだから、大きさを尊ぶ伝統が完成されて」、今のように大きさを尊ぶような文化になったとし、「日本は国土が狭くて人口密度が大きいので、小ささを尊ぶ伝統が完成されて」、今のような小ささを尊ぶ文化ができたとする傾向がある。

そして、大きさを尊ぶ文化の具体的な例としては、中国の長編小説の類を挙げ、小ささを尊ぶ文化の具体的な例としては、日本の俳句という短い(小さい)詩を挙げるのが一般的である。

しかし、大きさを尊ぶ文化であろうと、小ささを尊ぶ文化であろうと、そのような文化の生じる原因を、自然環境だけに頼って解明しようとする、当たり前のこととして、ど

うして、国土が日本よりも狭くて、人口の密度も日本より大きい国や、島などには、日本のような小ささを尊ぶ文化が形成されなかったのかという疑問が残る。

もちろん、一つの民族の文化形成に、その民族を取り巻く自然環境が、大きな働きをするということは、言うまでもないが、一つの民族の文化形成の要因としては、自然環境の他にも、歴史、宗教、教育、言語等と色々あるので、それらを一遍に全部駆使する必要はないにしても、他の要因も見渡しながら、原因究明をする必要がある場合もあると思う。

そこで、本論では、漢・日両民族の文化形成の最も大事な要因であると思われる、中国語と日本語の語レベルにおける特性(中国語と日本語の文レベルにおける特性はすでに考察済み「北星論集(社会福祉学部)第36号」)を先に考察し、そこで得られた結果と文レベルの特性とで、漢・日両民族の民族意識とも深く関わりのある、大きさを尊ぶ文化と、小ささを尊ぶ文化の本質と、それらが生じる原因を究明しようと思う。

### II. 語レベルの「具体性」と「抽象性」

中国の文化と日本の文化の違いに「具体的な指向」と「抽象的な指向」が挙げられるということは、社会福祉学部「北星論集」第38号で触れたが、そこでは中国語の「歇后语」と日本語の一般的な抽象現象を比較しながら、考察を進めた。そこで、ここでは、まず、中国語の書き言葉の原点である、「表意文字」、つまり「語」(中国の文字は一つの字が一つ

の語となるのが多い) を中心に見ていくことにする。

さて、中国語を表記する文字は、表意文字であるため、殆どの場合、一字が一語であることは、日本人が一番よく知っている。日本人は、漢字だけでは、助詞や助動詞、擬声語、擬態語などの多い日本固有の文化である、和語の表現が、どうしてもうまくいかないので、表音文字である、平仮名と片仮名を作り上げた。このようにして始めて助詞や助動詞などが自由に表記でき、日本固有の文化である和語も、そのまま自由自在に表記することが出来るようになったのである。従って、日本人は、漢字はあくまで、中国語の表記に一番適した文字であることを、世界中のどの民族よりもよく知っているはずである。

ところで、最近平仮名と片仮名は、日本人がそれを作る前に存在していたものであるという説があるが、少なくとも、現時点においては、世界中で平仮名と片仮名を使っている民族は、日本民族だけなので、平仮名と片仮名は、日本人だけの物であることは、疑う余地がないと思う。建築家が建物を設計する場合、必ずと言っていいほど、既存のなんらかの建造物や模型などを拠り所にした何らかの形を頭に浮かべながら、設計するのと同じく、人間はある新しい物を作り上げる場合、既存の何かにヒントを得ながら作り上げるようである。それと同じく、文字を作る場合でも、既存の他の文字から何らかのヒントを得ながら作り上げるのが普通であろう。つまり、物質が人間の意識を決定するということが、普通の常識であると思う。従って、日本人が平仮名や片仮名のようなものからヒントを得て、今日世界中で日本人だけが使っている、平仮名と片仮名を作り上げたとしても、人間の認識論に従ったものであり、非難を浴びるようなことなどは、何もないと思う。言ってみれば、平仮名の前身という物も、漢字からヒントを得たものであるから、結局平仮名と片仮

名とその前身は、共に漢字からヒントを得て作り上げたものであることには間違いがなく、人間の認識論を少しも逸脱していないから、現在の所有者の物であると見ても、何の差し支えもないと思う。それに、本論では、平仮名と片仮名は、漢字をヒントに作り上げたものではあるが、漢字とは全く異質の物であることが分かればそれで充分である。

さて、上述の平仮名と片仮名とは全く違う漢字、つまり語(表意文字は殆どの場合字を語と見ることが出来る)は、始めから何らかの形を念頭において作られたものであるから(六書全体が象形を基にしているとも出来るから)、どの字、つまり、どの語も、元をただせばある具体的な形を持つ客体に辿り着けると見る事が出来る。もちろん、現代の文字は象形の文字は少ないが、現在なお、象形文字が、偏旁冠脚という形で多くの文字に浸透していることは否めないだろう。従って、今なお多くの中国語は何らかの具象を持つものと関連しあう。

例えば、中国語は会意文字から成る語であっても、例えば、「轟」のように単純な音を表わす語のように見えるものが、多くの車を連想させたり、たとえ指事による文字が表わす語であっても、「東」のような語は、ありありと東の方向の木の間に日がのぼる光景が頭に浮かぶこともある。

象形文字から成る語でもなく、偏旁冠脚のような繋がりも全くない音訳の語であっても、中国語は何らかの意味を持たせるのが普通であるが、一旦何らかの意味を持たせると、直ちにその意味と関連のある具象的な何か話者の脳裏に浮かぶのである。

例えば、「札幌マーク・インスタントラーメン」を中国人は、「三宝乐」(三宝楽)と訳して使っているが、実は、この「三宝乐」という語は、「札幌」という地名を音訳したものである。これがどうして、「札幌マーク・インスタントラーメン」を指すようになった

のかについては、日本の「たぬきうどん」が、「たぬき」と呼ばれることが分かれば、容易に分かるだろう。まず、「札幌マークインスタントラーメン」が「札幌牌儿方便面」となり、これが更に「三宝乐牌儿方便面」となり、最後には、「たぬきうどん」が「たぬき」に変身するように省略されて、「三宝乐」となったとみることができる。

このように出来た「三宝乐」は、意味的には「たぬき」とは少し訳が違う。「たぬきうどん」が「たぬき」となったのは、単純な省略で、食堂で「たぬき」といえば、多くの日本人は「たぬきうどん」を思い起こすだろう。

しかし、「三宝乐」の場合は、単純に「札幌牌儿方便面」だけを思い起こすのではなく、文面の意味、つまり「三つの宝を得る事が出来て喜ばしい」という意味が生きてきて、「札幌牌儿方便面」は、宝のような食べ物で、それを得る事は宝を得るようなものと同じく、喜ばしい事だという意味が付加される。従って、「三宝乐」の場合が、「たぬき」の場合より遥かに具体的で、商品に対する価値も高くなり、消費者に対するインパクトも強くなる。

それなのに、どうして「三宝乐」は、中国においては思ったより売れないのかという問題が起こるが、そのわけは余談になる。中国人と日本人とでは、収入が違う。そして中日両国は物価も違う。商品によっては、中国の商品が日本の商品より何十倍も安い。特に、インスタントラーメンのような庶民向けの商品は、値段が安くなければならない。ところが、「三宝乐」は、値段的にはまだまだ中国人にとっては高嶺の花である。本当にまだまだ宝のような値段である。だから売れないだけで、「三宝乐」その物が持つ強いインパクトが消えたわけではない。

以上、中国語は、象形文字から成る語、象形文字と何らかの関連を持つ語、果ては象形文字とは何の関係もない音訳の語であっても、何らかの意味を背景に持っていて、日本語と

比較した場合、具体的であるという事を見てきた。

つまり、中国語は、中国固有の語であろうと、外国語を音訳した語であろうと、客体の具体的な事物の具象と何らかの関連を持つのが普通であり、日本語より具体的であるということを見てきた。

ところが、中国の音訳語は、日本語より具体的であるという事が、そう簡単に理解できるわけではない。そこで、中国語の音訳語は、「三宝乐」という語を選んで、これと作り方が似ているとみられる、日本語の「たぬき」と比較しながら見てきた。しかし、「三宝乐」が、「たぬき」より具体的である事は、依然として不明確であるかも知らないと思う。そこで、こんどは「三宝乐」と「たぬき」の、出来上がる過程を比較してみる事にする。まず、「たぬき」の方は、「たぬきうどん」の「うどん」が省略されて出来たので、1次省略語と称しよう。他方、「三宝乐」の方は、「札幌マークインスタントラーメン」が、1次省略の結果、「札幌」が得られ、この「札幌」が更に変化して、「三宝乐」となったのだから、便宜上2次省略語と称しよう。すると、「たぬき」と「三宝乐」の間には、1次省略語対2次省略語という対立が成立する。ところが、ここで言う「1次省略」、「2次省略」が共に本物の「省略」であれば、中国語の「三宝乐」の方が、日本語の「たぬき」よりもっと抽象的でなければならぬのである。というのは「省略語」は、省略される前の語より抽象化するからである。例えば、「たぬき」は「たぬきうどん」と「たぬき」を全部包含するので、「たぬきうどん」より抽象的である。

従って、「三宝乐」が、もし、本物の「2次省略語」であれば、2回も抽象化されたので、1回省略された「たぬき」よりもっと抽象的でなければならない。

ところが、「三宝乐」の場合は、「札幌マークインスタントラーメン」から「札幌」になるま

での、1回しか抽象化されておらず、「札幌」から、「三宝楽」になる変化は、抽象化ではなく、むしろ、その反対の具体化をしてしまったと見る事ができる。というのは、「札幌」は、理論的には、「札幌醤油」、「札幌クッキー」、「札幌トラクター」、「札幌箸」、「札幌ピン」、「札幌クリップ」等々が、包含されていると見る事が出来るが、「三宝楽」には、たとえ比喩ではあっても、「三つの宝物を得ることができて喜ばしい」と思われるようなものとは似ても似つかぬものは包含しないと見る事も出来るので、「札幌ピン」や「札幌クリップ」のようなものは、包含されず、「三宝楽」という枠の中から、食み出してしまうからである。

「札幌」と「三宝楽」をインターネットの検索の項目に喩えると、前者は一つのキーワードで検索した項目を内包したものであり、後者はダブルキーワードで検索した項目を内包したものであると見る事が出来る。

従って、「三宝楽」は、「札幌」や「たぬき」より一段と目的に近寄ったものであると見る事が出来る。

このように、中国語は、一見日本語より抽象的に見える語であっても、実際はその反対で、中国語の方が日本語より遥かに具体的である。

以上、語レベルで中国語と日本語を比較してみたが、中国語と日本語の間には、語レベルにおいても具体性に対する抽象性という対立が見られるようである。

一方、言葉は客体をありのままに一对一的に反映するものではない。民族の客体に対する見方を音声或いは文字で表現するものである。従って、言語に最も集中的に民族の価値観が反映される。つまり、言語に最も集中的に民族の文化が反映される。

従って、もし、本当に語レベルにおいても中国語と日本語の間には、具体性(二極性)に対する抽象性(一極性)という対立が存在するならば、中国の文化と日本の文化の間に

は、語の性質から来る文化の「具体的な指向」に対する「抽象的な指向」という対立が存在するはずである。

文レベルにおける「具体的な指向」対「抽象的な指向」は、『北星論集第36号』で考察したが、本論では語レベルにおける文化の「具体的な指向」に対する「抽象的な指向」を考察する。

この語レベルにおける「具体性」対「抽象性」の対立が成立すれば、つまり、語レベルの違いから来る、文化の「具体的な指向」と「抽象的な指向」の対立が成立すれば、従来のただ単に自然環境だけに頼って解明しようとした多くの文化現象が解明されるようになることはまず間違いないだろう。

例えば、中国の文化と日本の文化の間には、「大きさを尊ぶ」のに対して「小ささを尊ぶ」という違いが見られるが、従来はそれをただ単に、「中国は国土が広くて資源が豊かだから、大きさを尊ぶ伝統が完成され」、日本は「国土が狭くて、人口密度が極めて大きいので、小ささを尊ぶ伝統が形成された」というふうな、自然環境の要因の違いだけに頼って解明しようとする傾向があったが、自然環境だけに頼る解明である場合、日本よりも国土が狭く、人口密度も日本より大きかった国は、どうして日本のように「小ささを尊ぶ」文化を持つようにならなかったかという事実を解明しにくくなる。

そこで、本論では中国語と日本語の語という物の広範囲に渡る対立的なルールを考察してそこから生じる文化現象を観察し、従来の自然環境だけに頼る文化現象の解明の不備な点を指摘したいと思う。

### Ⅲ. 生成過程中的中国語の語と生成済みの日本語の語

ここでは少し角度を変えて、中国語の語の具体性と日本語の語の抽象性を考察し、それによって生じる文化現象を見てみることにする。

さて、中国語の辞書と日本語の辞書を比較してみても分かることであるが、中国語の語は、日本語の語と違って、多くの場合生成過程の語が語として扱われる。中国語は、一つの音節、つまり、一字が多くの場合一つの語で、ちゃんとした意味を持ち、しかもちゃんとした音の調子を持つ。このような語を現代中国語においては普通、語素というが、文語においては殆どが語「(単語)」そのものであった。

中国語においては、独立性の強い文語の語が進化をすると、独立性を完全に消失したり、或いは弱くなったりして、他の語と結合することによって多音節化するのが一般的である。意味も、一音節語の場合より具体化するのが一般的な傾向である。特に、意味においては、専ら他の語と結合することによってはじめて、一定な意味を表わし、違った語と結合すると、同じ語素でありながら違った意味を表わしたりするのが普通である。

このような進化の結果、中国語は、古代は独立した一音節の語が多かったが、現代においては二音節の語が多くなって来て、古代語(文語)と言えば、一音節語、現代語と言えば、二音節語(或いは多音節語)という相対立した現象が見られるようになったのである。

ところが、以上のような相対立した現象は、何も文語の一音節の語がすべて消えてしまった後、突発の現象としてまったく新しい現代の二音節の語が出現してきたわけではなく、現代の二音節の語というものの多数は、文語の一音節の語が他の語と結合してできたものである。つまり、現代語の二音節語(或いは二音節以上の語)は、文語であった一音節語を土台にして出来上がったものである。

例えば、現代語の「人民・仇人・走廊・耳朶・金子」のようなものは、文語の語であった、「人・仇・走・耳・金」のような語に他の語素がついてできたものである。

ところが、現代中国語においても「人・仇・

走・耳・金」のような語は、依然として存在しており、しかも辞書においても語項目としてれきつとした位置を占めている。

中国語においてはこのような一音節語を三種類に分けることができるが、その中の絶対多数は現代語の二音節語の要素として辞書に収録されている。したがって、これらの膨大な数の語は、もっぱら他の語を作るために存在するといっても過言ではない。

事実これらの語の絶対多数は、独立した語として項目を立ててあるが、その後、またこれらの語が一つの語素としてできた現代の二音節語(或いは二音節以上の語)も収録してあるのが一般的である。

したがって、中国語の辞書は当たり前のこととして、先ず一音節の語を語項目として立て、その語の意味を日本語の辞書のように、...と分けながら説明していくが、ここまでは日本語の辞書と何の違もなく同じである。しかし、その後の部分は、日本語の辞書とは大違いで、二音節語(或いは二音節以上の語)が並ぶ。このように一音節語の後ろに来る二音節語、或いは二音節以上の語は、前の一音節語によってその数が違うが、場合によってはその数が膨大なものになることもある。

前で取り上げた一音節語「人」を例に挙げると次のようである。

まず、ここでは中国語の辞書『現代汉语词典』(商务印书馆 1987)と日本語の辞書『新明解国語辞典』(三省堂 1989)に収録してある「人」という語項目を比較してみることにする。

『現代汉语词典』(以下「中国語の辞書」と称する)にのっている「人」の意味は種類に分けて説明をし、それぞれの意味に当たる例文も挙げているが、ここまでは『新明解国語辞典』(以下「日本語の辞書」と称する)と大差はない。

ところが、その後に来る二音節語或いは二音節以上の語は、その数が膨大であるが、日

本語の辞書ではそれらが集中的に出現することはない。日本語の辞書においては「人」という語項目と、例えば、「人材(人才)」という語項目とでは語種が違う上に、語頭の発音も違うので隣接して出現することはない。しかし、中国語の語「人」は、後続の二音節の語(或いは二音節以上の語)を構成する語素であり、語音的にも語頭の音が同じ語音なので、次に順序を示した膨大な二音節語群が「人」に後続する。

【人本主義】

【人才】

【人称】

【人次】

...

【人中】

【人種】

中国語の一音節語「人」の場合、後続の二音節語(以下、二音節語、或いは二音節以上の語を便宜上二音節語と称する)は、133もあって、実に驚くほど膨大であるが、それらの語項目を逐一意味の解釈から、用法の例まで挙げて説明をすることもある。

このように、中国語の辞書は、一つの語項目、例えば、「人」と言う語項目を説明する場合でも、日本語の辞書と同じく「人」という語が持つ意味を、  
、  
、...というふうに順序を立てて説明をし、用法の例文も挙げるが、その後の後続の二音節の語項目とその意味の説明や用例などは、日本語の辞書においては、集中的に配列せず、語音順に配列するのが一般的である。つまり、中国語の辞書と日本語の辞書を比較してみると、中国語の辞書は、語項目ごとに語素を説明する部分と、後続の二音節語を配列する部分の二つの部分からなるが、その中の一つの部分は日本語の辞書と同じ部分であり、もう一つの部分は日本語の辞書においては、語音順に配列するという違いがある。

また、中国語の辞書の中の一つの語項目、

例えば、「人」という一つの語項目の前半の説明も、日本語の辞書の中の「人」という語項目の説明の内容とは、厳密には違いますが、特に注意を引くのは、後続の二音節語の配列である。例えば、「人」という語項目の後続の二音節の配列

【人本主義】

【人才】

【人称】

【人次】

...

【人中】

【人種】

の場合、先ずその数が膨大であること、「人」の場合、後続の二音節語の数は133というぼう大な数である。

では、どうして中国語の辞書においては後続の二音節語を集中的に配列し、日本語の辞書においては二音節語を語音順に配列するのか?

実は、これが分かれば、中国語の語と日本語の語の違いが分かりやすいが、まず、中国語の語の場合、「人」という語項目の後続の二音節語は、皆「人」から生成したものであり、語を使用する立場から見た場合、後続の二音節語は、皆「人」という語より具体的な意味を持つ。つまり、後続の二音節語は皆「人」を具体化したものである。

では、日本語の語「人」にはどうして「人」を語頭とする二音節語群が、中国語の辞書の場合のように集中的に隣接しないのか。それは、日本語の場合、「人」と「人」の後に来る二音節語は同種の語ではなく、異質の語、つまり、和語と漢語という大きな違いがあるということ、それから「人」と二音節の漢語は、語頭の音声が違うということ等から、二音節語群は「人」に隣接されずに、それぞれ独立した語として扱われたのではないかと思われる。

それでは、日本語の場合、「人」の後に来る二音節語、つまり「人」という語素を語頭

にした漢語は、中国語の語の場合と同じく、133という数字になるのか？

それは明確に日本語の「人」の後に来る「人」を語頭とした漢語の数は、中国語の語の場合より少ないということは言えると思う。というのは、上で取り上げたわずか6つの二音節語の中、日本語の辞書にはないものが二つもあるからである。その二つというのは、具体的には、「人次」と「人中」というものであるが、わずか6語の中、2語も日本語でないということは、133語の中にはかなりの数が日本語でないということである。これはつまり、中国語の語素が具体化して生じる二音節語の方が、日本語の漢語語素が具体化して生じる二音節の語より多いことを意味する。

以上のことから、中国語の語の場合は、語素が（一音節語が）常に語素より具体的な意味を持つ同種語の二音節語を大量に生成するのに対して、日本語の語の場合は、語素が（絶対多数が二音節以上の語）完璧な独立性を持ち、生成済みの語なので同種の語の二音節語は生成せず、日本語の中の漢語という語は、例えば「人（じん）」の場合、「人材」、「人種」のような二音節語を生成するが、その数は中国語に比べて大変少ないということが言えるのではないかと思う。ただ日本語の和語の場合、例えば「ひと」のような二音節以上の名詞の場合、「ひとびと」、「ひとざらい」、「ひとなつっこい」のような多音節語が生成されることはあるが、その数は、一音節の中国語の語素に比べるともの数にも入らないということが言えるのではないかと思う。

それに中国語の語素は独立性の弱いものが多いため、一音節語の多くは、専ら一音節の語より具体的な意味を持つ二音節語を作るために存在するといっても過言ではないだろう。

したがって、この辺でもう、中国語の一音節語の多くは生成過程中的の語であり、しかも生成後の二音節語は、意味的に一音節の語より具体的であるのに対して、日本語は、殆ど

が多音節語で、生成済みの独立性の強い語であるが、日本語の中の漢語という語種は、中国語と同じ性質を持つものもあるけれども、それでも中国語のように大量の二音節語を生成することは出来なという結論を出してもいいのではないかとも思える。しかし、これまでの考察は、対象が名詞だけであったので、以下もう少し範囲を広めて考察してみたいと思う。

さて、動詞の場合はどうだろう。動詞の場合も中国語は一音節の語素が多く、例えば、「打」という語素（一音節の動詞）は、日本語で言うと「なぐる」、「打つ」などの意味を持つ、独立性の極めて強い動詞であるが、それでも生成過程中的の語であることと見ることができる。というのは、この「打」も二音節語を生成し、しかも膨大な二音節語を生成するが、それらの二音節語は皆「打」より具体的な意味を持ち、また、それらは二音節語群を成して「打」に後続するからである。

「打」から生成された二音節の語群を中国語の辞書から、前述の名詞語素の二音節の語群を引くような形で引くと次のようである。

- 【打把勢】
- 【打靶】
- 【打靶场】
- 【打摆子】
- ...
- 【打嘴】
- 【打坐】

のようであるが、その数はなんと180もある。勿論、180の中には日本語の漢語にない語が多く、皆「打」を具体化したものばかりである。

「打」から生成した二音節語「打魚」というような語は、日本人だったら魚を「打つ」という意味ではないかと思うかも知れないが、実は「魚を捕る」という意味で、「打つ」=「捕る」という結末になってしまう。

このように [打つ] というような動詞語素も、前述の名詞語素と同じく、二音節語が生

成する前はどんな意味になるのかも分からず、生成を完了して始めて、こんな意味に使われる語であったのかとその結末が分かってくるものである。

つまり、中国語は、動詞の場合でも、これはもう間違いなく正真正銘の独立語の動詞だと思ったものでさえ、実は生成過程の語で、無数の生成結果の二音節語が後続するのである。

一方、日本語の動詞「打つ」のようなものは、完全に生成済みの動詞で、その後に膨大な二音節の語が後続するわけでもなく、せいぜい「打ち破る」というような複合動詞を作る(中国語の動詞も複合動詞をつくる技能を持っている)ぐらいである。

では、形容詞の場合はどうだろう。まず、中国語は、形容動詞を立てないので、形容詞といえ、日本語の形容詞と形容動詞を全部含むものと見ることができるとを念頭に置く必要がある。

さて、中国語の形容詞も、動詞の場合と同じく、一音節の語素が多く、例えば、「大」という語素(一音節の形容詞)は、日本語でいうと「おおきい」という意味を持つ、極めて強い独立性を持つ形容詞であるが、それでも生成過程の語であると思わなければならない。というのは、この「大」という形容詞も、膨大な二音節語を生成し、しかも、生成された膨大な二音節語は、動詞や名詞の場合と同じく、膨大な二音節語群を成して、「大」に後続するからである。

名詞や動詞の場合と同じく、「大」から生成された二音節語を配列すると次のようである。

【大白】(1)

【大白】(2)

【大白菜】

【大伯子】

...

【大总统】

【大族】

形容詞「大」の場合の生成後の二音節語の配

列順序は上列のようであるが、その数は、なんと353にもものぼる。勿論、こんなに多くの二音節の語の中には、日本語の漢語にもない語が多いが、生成された二音節の語が多いということは、それだけ「大」の意味も広まるということであり、具体性も拡大していくということである。

もし、日本語の場合、「イヌ」に対して「黒いイヌ」、「白いイヌ」等は、具体的な概念を表わし、具体的であるということが成り立つならば、中国語においても、「大」に対して353という二音節語は、具体的な概念を表わし、具体的であるということが成り立つものである。

一方、中国語の場合、「大」は、353種類の具体的な語を生み出す(生成する)ということは、普通は想像もできないぐらい細かく具体化するということである。

そして、中国語の「大」は、独立語として使う場合より、具体化して使う場合が絶対的に多いのであるが、これは何も形容詞だけではなく、以上述べた名詞も、動詞も同じで、「大」を含めた語素という語は、日本語の語に比べて、想像もできないぐらい具体化するのである。

したがって、中国語の語素という語は、具体的な語を生成するために存在し、生成済みの二音節語は、日本語の語と同じく使うために、存在するということができる。つまり、中国語の語素は生成過程の語であるのに対して、日本語の語は生成済みの語であるというわけである。これを言い換えると、中国語の語は、語を作るために存在するのに対して、日本語の語は、文を作るために存在するということができる。

そして、この対立が成り立つ範囲は、以上見てきた名詞の範囲、動詞の範囲、形容詞の範囲、つまり、体言と用言の範囲という広範囲にわたるものである。

この為に、中国語の辞書は、語素がどうい



う語を作るのかということが主な記述の内容であるが、日本語の辞書は、語がどういう文を作るのかということが主な記述の内容となる。例えば、中国語の辞書から名詞「人」を引くと、「人」その物の意味の記述もあるにはあるが、何と云っても、133の語とその意味の記述が、多くのスペースを占める。ところが、日本語の辞書から名詞「ひと」を引くと、文中ではどのような意味を表わしているのか、つまり、どのように文を作るかという記述が中心となっている。

したがって、中国語の語は多量の語を作るために存在し、多方面に分岐する性質、つまり、多方面の具体的な意味を持つものに分かれていくのに対して、日本語の語は、一つの語がすでに多方面の意味を持っていて、同じ一つの語が違った文においては違った意味に使われる傾向を示すということが言える。

これは即ち、中国語は広範囲に渡って、語レベルにおいても「具体性」を示すのに対して、日本語は広範囲に渡って、語レベルにおいても「抽象性」を示すということである。

だから中国語は、

真干净（大変きれいだ）。

と言わなければならないのに、日本語は、  
わ！きれい！

で充分である。わざわざ「大変」という語で修飾して具体化する必要はないのである。

このように、日本語の語は、「イヌ」という語の中に「黒いイヌ」の意味が含まれているように、「きれい」の中に、「大変きれい」という意味が含まれているのである。つまり、日本語の語は抽象的であるのに対して、中国語の語は具体的である。

以上、体言と用言の広範囲に渡って、中国語の語レベルにおける具体性と、日本語の語レベルにおける抽象性を考察してきたが、中国語と日本語の間には、語レベルにおいても、「具体性」対「抽象性」という関係の成り立つことが分かっていただけだと思う。筆者は、文

レベルにおける「具体性」対「抽象性」という関係を、「二極性」対「一極性」という対立関係で示したので（社会福祉学部『北星論集』第36号）、語レベルにおける「具体性」対「抽象性」の関係も、「二極性」対「一極性」の関係と言うこともあることを断っておきたい。

さて、以上のような語レベルにおける中国語の語と日本語の語の考察結果が出たので、次ぎは、従来の、ただ単に自然環境だけに頼って解明した文化現象を、一番集中的に民族の価値観が反映される、つまり、文化現象が一番集中的に反映される言語現象によって解明してみようと思う。

#### IV. 文化の「具体的な指向」と「抽象的な指向」

さて、文化に関する一部の論文、特に中国の文化と日本の文化に関する比較文化論のようなものの中には、自然環境の文化に対する影響を過信してしまって、いい説明にならなかつたりして、大変惜しいと思うものもある。しかし、文化を云々する場合、自然、歴史、教育、宗教、民族、言語等の要因を一遍に総動員するのも、時と場合によっては不可能であることも事実であろう。それに、人文科学は自然科学と違って、始めから例外のないルールというものはありえないので、自然科学のような証明はできないと思うが、それでも極力正確さを期したいものである。

ところで、中国の文化と日本の文化の違いの一つに、中国の文化は「大きさを尊ぶ」のに対して、日本の文化は「小ささを尊ぶ」というのがあるが、その証明として普段よく言われるのが、中国の文化の場合、「中国は国土が広くて資源が豊富だから、大きさを尊ぶ伝統が完成されて」そうなたし、日本の文化の場合は、「国土が狭くて、人口密度が極めて大きいので、小ささを尊ぶ伝統が形成されて」そうなたたというのが一般的である。

もし、大きさを尊ぶ伝統形成と、小ささを

尊ぶ伝統形成の原因が、自然環境や、自然条件だけによるものであれば、当たり前のこととして、日本よりも国土が狭くて、人口密度も大きかった国や島の人達にはどうして日本のような「小ささを尊ぶ」伝統が形成されなかったのかという疑問が残るだろう。

もちろん、民族の文化形成にその民族を取り巻く自然環境が、大きな働きをするということは、誰も否定できない要因であることは疑う余地もないだろう。しかし、人間の素朴な疑問として、上述の疑問が残るのもまた自然なことであろう。

そこで、筆者は、普段日本人の口からよく聞かれる「日本人特有の発想」や「日本のDNA」というものを考えるようになり、当然、「日本人特有の発想」があれば、「中国人特有の発想」もありうるはずであり、「日本のDNA」があれば、「中国のDNA」だってありうるはずであると思うようになり、それを追求してきたが、今のところは、笠井昌昭氏の『日本の文化』という本に出る「日本人の脳の特長説」(実は、角田忠信氏の言う「日本人は音さえも左の脳で知覚している、たいへんめずらしい民族である」という説のこと)しか知らない。

ところが、不幸にも筆者は医者ではないので、脳のことについては何も知らないが、ただ脳と関係が全くないとも言えない、人間の思考に不可欠の言語、民族の文化を決定する第一要因とも思われるぐらいの言語については、前述のような考察をしてみたのである。実は、日本人が普段使う日本語は、大変めずらしい言語である。文レベルにおいては中国語は「具体性」(二極性)を示すのに対して、日本語は「抽象性」(一極性)を示すが(社会福祉学部『北星論集』第36号)、語レベルにおいても日本語の語は、「抽象性」(一極性)を示すのに対して、中国語の語は「具体性」(二極性)を示すということは本論で証明した通りである。

このように日本語は大変めずらしい言語であるが、日本語がめずらしい言語であるからこそ、日本語と対照的な中国語もまためずらしい言語であると見ることができるのではないだろうか。

つまり、めずらしい言語と対照的な言語も、まためずらしい言語であると見ることができるのではないだろうか。

そこで、これらの珍しい言語同志が生み出す、珍しい文化現象を見ることにするが、それは他でもない、「大きさを尊ぶ」中国の文化と、「小ささを尊ぶ」日本の文化のことである。中国には「大きさを尊ぶ」文化があり、日本には「小ささを尊ぶ」文化があるということは、今は常識として巷の人達が言っていることであるが、その原因は、自然環境だけではカバーしきれない部分があると筆者は思っている。

というのは、「大きさを尊ぶ」文化の例としては、万里の長城や長編小説などがよく挙げられ、「小ささを尊ぶ」文化の典型的な例としては、俳句がよく挙げられるようであるが、その、俳句と自然環境との結びつきというのは、季題、つまり、季語であるが、その季題が俳句という詩を短く(小さく)する唯一の不可欠の要因にはならないからである。

それに、俳句に関する動向の一つとしてあげられるのは、季語否定であるが、もし、季語が俳句成立の必須不可欠の語であれば、俳句から季語を排除しようとする自身が無茶なことであり、有り得ないことである。ところが、今現実に季語否定は行なわれている。日本人が日本の伝統文化に向かってこんな無茶なことをするだろうか?よって、季語の存在は俳句成立の必須不可欠の条件でもなければ、自然環境という条件だけが唯一の、俳句成立の原因をカバーしているものとも言い切れないようである。

もし、本当にそうであれば、別に何かがあって、それが日本の詩を、世界一短い詩にする

ことができたと思えるのが妥当であろう。そこで筆者は、日本語の語の「抽象性」(一極性)が、それに当たるものだと指摘したい。

そもそも「抽象性」というのは、多くの具体的な意味を含む性質であると見ることができる。つまり「イヌ」という語の抽象性は、「黒いイヌ」、「白いイヌ」などの意味を含む性質である。このように見た場合、如何なる生成済みの語であろうと、生成過程が終わったら、大なり小なりの抽象性は具有することになる。

ところが、生成済みの中国語の語と、日本語の語を比較した場合、日本語の語の方が断然抽象度が高いということが分かる。

つまり、美味しい  
という日本語には、

真好吃 (本当に美味しい)

非常好吃 (大変美味しい)

という中国語の意味が内包されていて、全体的に、中国語の語は、日本語の語より、抽象度が低いことを示す。よって、中国語の語は「具体性」を持ち、日本語の語は「抽象性」を持つということが言えるが、この日本語の語の「抽象性」と文の抽象性(社会福祉学部『北星論集』第36号)が、日本の詩を短くすることができたのである。

つまり、5, 7, 5というわずか十七音節の詩、語や文としては十七にみたない、そのわずかの語と文でも、「抽象性」を持つ語と文でありさえすれば、その「抽象性」を持つ語と文に、多くの「具体性」を持つ語と文の意味を搭載することができるので、多くの意味を表わすことができる(日本語の抽象性には詩の余韻となるもの、日本人の情緒なども含まれるが、それについては回を改めて述べる)。よって、長い詩を短い詩にすることができ、短い詩に(短い抽象的な文章に)、多くの具体的な意味を持たせることもできるのである。

このようにして「抽象性」を持つ語と文は、長い詩を世界一短い詩にしてしまうことができたのである。

以上のように、わずか何語という語と文に多くの語と文の意味を搭載することができなかったなら、俳句は生まれなかったのかもしれないと筆者は思っている。

日本の俳句の意味(抽象性を持つ語と文からなる詩の意味)を、具体性を持つ語と文で訳してみると、どうしても詩にならずに元の俳句より長い文章になってしまう。

例えば、「古池や蛙飛びこむ水の音」という芭蕉の句を、「具体性」の強い中国語に直すと次のようになる。

有几只青蛙跳入古池里发出扑通扑通的水声(何匹かの蛙が古池にポトンポトンと飛込んで水の音を立てている)。

このようになってしまっ、名句が台無しになってしまう。

しかし、このような文章でも、「何匹かの蛙」を「蛙」に搭載し、「ポトンポトンと飛込んで」を「飛びこむ」に搭載し、「水の音を立てている」を「水の音」に搭載すると、芭蕉の名句が出来上がるということになる。

もちろん、これは世界最短(最小)の詩の形成の構図を説明したもので、実際には長い文章が頭に浮かんでも、すぐそれを、抽象性を持つ語や、文にうまく搭載できるかどうかは、人により、訓練などによるものであるかも知れないが、世界最短の詩を作るためには、何よりも、抽象性を持つ語や文が不可欠であることは明々白々の事実である。

ところが、その抽象性を持つ語や文というのは、日本人だけが持つものである。だから日本人だけが世界最短の詩、つまり、俳句を作ることができたのである。

一方、大きいものを作る可能性の方が、それは具体性を持つ文や語が、その可能性であると見ることができる。人間は言葉によってものを考え、その考えによって行動をする場合が多いようである。また、一つの民族も、民族共通の言葉を用いて、民族共通の価値観を持つものを考え出し、そしてそれを行動に

移すことがある。つまり、同じ言葉を使う一つの民族は、他の言葉を使う他の民族とは違った考えを持ち、違った行動をとることがあるが、これがその民族のDNAであると思えることができると思う。したがって、中国人は、中国語によってものを考え、その考えによって行動をする場合が多いが、その中国語というものは、具体性を持つ言語で、一つの文や語があるとすれば、その意味は、いつも具体的な方向に向いて多岐に分かれていく。しかも、膨大な数に分かれていく。これが中国人の普段の思考法に浸透して、一つの対象物に対して思考を巡らす場合でも、膨大な方向に渡る可能性にまで、考えが及び、行動までが多極化するようになる。したがって、中国人は、一つの対象を個々に分けて扱う行動をとるようになってくる。

以上の比較を簡単に言うと、日本人は、個々の物を一つにまとめて扱う行動をとり、中国人は、一つの物を個々に分けて扱う行動をとることができる。ここでは言語上のこのような行動の例を挙げてみる。

日本人の場合、「どちらへ...」と言うと、

「ちょっとそこまで...」と答る。

「～に行つて、煙草と、ビールをかって来る」とは答えない。

中国人の場合、「先生は帽子を被っている」とは言わずに、

「先生は、頭の上に、帽子を、一つ被っている」と言う。

これを見ても分かるように日本人と中国人の行動上の違いの根底には、言語を基盤にした思考上の違いがあるのではないかとも思われるが、それは、また、民族の共通性となるものでもある。民族の共通性であるがゆえに、無意識の一面もあるが、一旦自分達の行動を意識するようになると、誇りを持ち、尊ぶようにもなる。

それから、日本人の場合、個々を一つにして扱うと、自然に一つの容積(一極性)を持つ

ものに向かい、小くなりがちである。

中国人の場合は、一つの対象物を、膨大な個々に分けて扱うので、自然に集大成の容積(多極性)を持つ物に向い、大きくなりがちである。

したがって、日本人は、小ささを尊ぶようになり、中国人は大きさを尊ぶようになる。

以上述べた小になる文化と、大になる文化を、「内包」の文化、「集大成」の文化とも言えるのではないかと思われる。ここで言う「内包」と「集大成」を、文学作品に喩えると、「俳句」と「水滸伝」のような作品と、『水滸伝』のような長編小説になるのではないかと思われる。というのは、俳句は一つの短い文章でありながら、多くの文の意味を内包し、『水滸伝』は、無数の独立した具体的な「回」が集大成になってきた小説であるからである。

「内包」と「集大成」の以上のような特性から、日本の文化を「内包」の文化といい、中国の文化を「集大成」の文化といった方がよいのかも知らない。というのは、このように言うと、日本の文化は小ささを尊ぶ文化であることが理解しやすくなり、反対に、中国の文化は、大きさを尊ぶ文化であることが理解しやすくなるからである。

また、「内包」と「集大成」は、物、つまり物体にも喩えられる。例えば、「内包」は日本の重箱に喩えられる。一つの容積を持つものの中に、いっぱい具体的な小箱が入っていて、取り出そうと思えばたくさん取り出せるが、日本語の文や語が抽象的であるという特性をそっくりそのままイメージ化した物体のようなものである。そして「集大成」は、ちょっと大きすぎるが万里の長城に喩えられる。万里の長城は、内城、外城、中城、秦の時代の城、戦国の時代の城などと、部分、部分が集まってできた大きい物である。一つの物が、部分、部分からなるという点では、中国語の特性を備えているものと見ることができる。

したがって、日本の文化を「内包」の文化、

中国の文化を「集大成」の文化と言うと、小ささを尊ぶ日本の文化と、大きさを尊ぶ中国の文化は、自然環境という要因の他に、言語に因るところが大きいということが理解しやすくなる。

ところが、ここで言う「内包」と「集大成」というものは、とりもなおさず、筆者の言う「一極性」(抽象性)と、「二極性」(具体性)という言語の特性のことである。

よって、小ささを尊ぶ日本の文化は、日本語の特性から形成された文化であり、大きさを尊ぶ中国の文化は、中国語の特性から形成された文化であると言っても大きくはずれることはないのではないかとと思われる。

以上のことが分かれば、「小ささを尊ぶ文化」という物は、結局は、日本語の一極性(抽象性)から来る「文化の抽象的な指向」の一つの具体的な例であるとも見ることができ、また、「大きさを尊ぶ文化」という物も、中国語の二極性(具体性)から来る「文化の具体的な指向」の一つの例であるとも見ることができのではないかと思います。

もちろん、万里の長城というようなとても大きく大きい物体は、広い場所を占めるため自然環境との関わり合いを、無視するわけには行かないが、あくまで、「大きさを尊ぶ文化」といえども、その発生の起因は、中国語の「具体性」という特性によるところが大きいのは事実のようである。

そこで、ついでに、言語に関する次のような点も指摘しておきたい。言語の変化は激しい物であるとよく言うが、激しく変化するというのは、新語の発生、古い語の消失ぐらいのもので、文中の成分の順序の変化は千年、二千年と掛かるものである。例えば、日本語の文中の「主語 目的語 述語」という順序と、中国語の文中の「主語 述語 目的語」という順序は、文語であろうと、現代語であろうと、皆同じである。つまり言語の特性という物は、長く続いて、そこから民族の発想が生

まれ、民族の行動が生まれ、民族の文化が生まれる。そのため、言語は、民族の文化形成の諸要因の中でも、最も大きな比重を占めることは確実のようである。

したがって、中国の「大きさを尊ぶ文化」は、「文化の具体的な指向」の一つの例と見ることができ、日本の「小ささを尊ぶ文化」も、「文化の抽象的な指向」の一つの例と見ることができのではないかと思います。

## V. おわりに

本研究において筆者は、まず、語レベルにおける中国語の具体性(二極性)に対する、日本語の抽象性(一極性)という相違点が存在することを考察した。文レベルにおいても中国語と日本語の間には、具体性(二極性)に対する抽象性(一極性)という対立が見られるが、それについても筆者は、北星学園大学社会福祉学部「北星論集」第36号「言語から見た中国の文化と日本の文化の相違点」(1~14)において考察済みである。以上の考察を元に、漢・日両民族の民族意識とも深く関わりのある、大きさを尊ぶ文化と、小ささを尊ぶ文化の本質と、そのような文化が生じる原因を究明した。

如何なる文化であろうと、文化と呼ばれるものには、個人の発想や価値観ではなく、民族の発想と民族の価値観が反映されなければならないと思うが、その民族の発想と民族の価値観を、最も適切に反映するのは言語ではないかと思う。言語は、客体が人間の目に映った物や、人間の心の中で考えた物、意志、感情など、存在している物を基準に描写した物ではなく、民族の客体に対する見方、民族の価値観などを、音声や文字で表現した物である。したがって、違った民族が同じ客体を表現する場合でも、違った表現(文、或いは語を用いた表現)をすることが多い。例えば、日本人は、夫婦がお互いに相手呼び合う場合、「お父さん」、「お母さん」というふうに、

お互いが子供の立場に立って相手を表現する。これに対して、中国人は、夫婦が相手と呼び合う場合、「子供のお母さん(孩子他妈)」、「子供のお父さん(孩子他爸)」というふうに、あくまで自分の立場に立って、相手が子供とはどんな関係にあるかを具体的に表現したものを、呼称として呼び合う。この中国人の呼称は、言語による「文化の具体的な指向」の一例であり、日本人の呼称は、言語による「文化の抽象的な指向」の一例であると見ることができるが、この例からでも、民族が違えば考え方や発想が違ってくるのが分かります。逆に、考え方や発想が違えば言語の表現も違ってくるのが分かる。それに、人間の考えはほとんどの場合言語によって行われるので、言語が、民族の文化に一番近い所にある物であると、もう一度強調しておきたい。

[引用文献]

- 『新明解国語辞典』第四版 金田一京助 編  
柴田 武 等 1989年
- 『現代汉语词典』 商务印书馆中国社会科学院语言研究所词典编辑室1987年
- 笠井昌昭 (1997) 『日本の文化』ペリカン社
- 崔 春基 (1999) 「言語から見た中国の文化と日本の文化の相違点」『北星論集』(北星学園大学社会福祉学部) 第36号

[Abstract]

## Chinese Culture and Japanese Culture : part 2

Shunki SAI

A study was made of the linguistic difference between Chinese and Japanese at the word level. A fundamental difference was found between the two languages. Linguistically, Chinese is concrete while Japanese is abstract. A similar difference of concreteness versus abstraction was also found at the sentence level, and it was already described in the paper “Chinese Culture and Japanese Culture in their Views of Languages”, Hokusei Review No.36 ; 1-14.

Based on new findings, this study further investigates the nationalities of the two nations and unveils the essences of the ‘culture which values scale’ and the ‘culture which values detail’ as well as the cause of their culture development.

